九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

心理動詞の項構造と使役化

萱嶋, 崇
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/1560251

出版情報：九大英文学. 56, pp.127-140, 2014-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

心理動詞の項構造と使役化

萱嶋　崇

1. はじめに

日本語の心理動詞は、Bando (1996)、寺村(1982)、清水(2007)らによると、目的語の格表示に基づき、(1)のように 3 種類に分類される。そのうちニ格しかとらないものは、受動化できるかできないかで更に 2 種類に分類され、受動化できないものを誘因型、できるものを対照型と呼ぶ。

(1) a. ニ格型
(誘因型)　あきれる、いらだつ、うろたえる、うっかりする
(対象型)　あきる、ほれる、むかつく
b. ヲ格型
あなどる、いつくしむ、うたがう、うやまう、なつかしむ
c. 両用型
いかる、うれえる、かなしむ、ためらう

これらの心理動詞は、使役文への埋め込みについて(2)に示されているような対比を成す。

(2) a. ニ格型
(誘因型)　* ツアーガイドが観光客を/に待ち時間にいらだたせた 。
(対象型)　太郎が花子を/?に先生にほれさせた。
b. ヲ格型
犯人が刑事*を/に別の人間を疑わせた。

c. 両用型

太郎が花子をその事件*を/に悲しませた。

太郎が花子にその事件を/?に悲しませた。

(2)からわかるように、ニ格誘因型のみ使役文に埋め込むことができない。本稿ではこの点について、心理動詞の項構造に関して新たな提案を行うことで説明を試みる。本稿は次のように構成されている。2 節では心理動詞の項構造に対する分析として Pesetsky (1995)を概観し、その分析が日本語に拡張できるかどうかを議論する。3 節では本稿の提案として、被影響項が含まれる派生に機能投射 VoiceP の存在を仮定し、その統語的機能を定義する。4 節において 3 節の想定をもとに心理動詞の使役化について議論する。5 節を本稿のまとめとする。

2. 先行研究

心理動詞の項構造に関する議論として、ここでは Pesetsky (1995)を挙げる。心理動詞は(3)のように、経験者が主語、対象が目的語に現れることもあれば、対象が主語、経験者が目的語に現れることもある。便宜上、経験者が主語に現れる心理動詞を ES 心理動詞、経験者が目的語に現れる心理動詞を EO 心理動詞と呼ぶ。

(3) a. I fear thunder. (ES)

b. Thunder frightened me. (EO)

この事実は、Baker (1988)の意味役割付与均一性仮説(UTAH)を考えると問題となる。

(4) 意味役割付与均一性仮説
(Uniformity of theta assignment hypothesis: UTAH)
Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure.
(Baker 1988: 46)

(4)によれば、経験者や対象などの項が生起する基底位置が深層構造において同じであることになるので、(3)のような項の分布を捉えるには何らかの説明が必要である。Belleti and Rizzi (1988)は、(3b)のような EO 心理動詞の構造は、(3a)の ES 心理動詞から派生したものであるという分析を行っている。これに対し Pesetsky (1995)は、(3a, b)はそれぞれ現れている項が異なると主張することでこの問題を回避している。従来 theme と呼ばれてきた意味役割は、動詞によって原因と標的/主題に二分される(標的と主題は意味的な違いはあるが項が生起する位置は同じである)。この 2 つの意味役割の違いを、(5)、(6)に具体的に示している。

(5) a. Bill was very angry at the article in the Times. [標的]
b. The article in the Times angered/enraged Bill. [原因]
(Pesetsky 1995: 57)
(6) a. John worried about the television set. [主題]
b. The television set worried John. [原因]
(Pesetsky 1995: 58)

(5a)では、Bill は Times の記事を読み、それを評価し、何らかの批判的な意見を持ち怒りを覚えたという解釈が得られる。これに対し(5b)では、Bill が記事について必ずしも批判的な意見を持っているわけではない。むしろ記事そのものは素晴らしいと考えていてもよく、記事の内容が政府の崩壊を示すもので、怒りを覚えたと解釈することもできる。また(6a, b)を対比

すると、(6a)では John の心配する先にはテレビそのものがある。つまりテレビが発火しそうだったり、落ちかけていたりしていて、それについて心配しているという状況である。(6b)では John が心配しているのは必ずしもテレビそのものというわけではない。John は探偵で、完全に盲目の男の部屋にフルカラーテレビがあり、目も見えないのに一体何故こんなテレビがあるのかと思いを巡らせているという読みも可能である。これらの例で示される標的/主題と、原因との違いは、感情の向かう方向であるといえる。標的/主題と経験者の関係について言えば、経験者の感情が標的あるいは主題に感情が向かっている。原因と経験者の関係について言えば、原因が経験者に感情を持たせ、その感情は原因ではなく他の何かに向かっている。

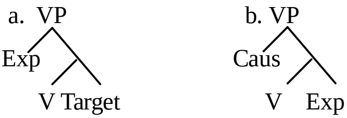
では、(3)の例に戻る。(3a)では、John の恐怖の感情が雷に向かっている。よって(3a)の心理動詞 fear がとる項は経験者と標的である。(3b)では、雷が John に恐怖の感情を抱かせているが、その恐怖の対象が雷であると明確に決まっているわけではない。よって(3b)の心理動詞 frighten がとる項は経験者と原因である。このように考えると、項同士の主題的関係が同一ではないため、同じ基底位置に生成する必要がない。したがって、(3)に見られるような項の分布は、UTAH にとって問題とはならない。fear 類の心理動詞と frighten 類の心理動詞の項構造を提示するにあたって、Pesetsky (1995)では(7)のような意味役割の階層が想定されている。

(7) Causer > Experiencer > Target / Subject Matter

(Pesetsky 1995: 59)

(7)の意味役割の階層性が統語的に保持されるとするならば、(3a)と(3b)の統語構造はそれぞれ(8a)と(8b)のようになっているはずである。経験者の項は(8a)では VP 指定部、(8b)では動詞の補部と異なる位置に生起しているが、(8a)では経験者と標的、(8b)では原因と経験者というように項の主題的関係が異なるため、UTAH に違反するものではない。

(8) a. b.



では、この分析が日本語にあてはまるかどうかを考える。英語の場合、ES 心理動詞の場合は目的語が標的であり、EO 心理動詞の場合は主語が原因であったが、日本語においても基本的にこの想定は当てはまるようである。

(9) a. 花子がその事件を悲しんだ。

b. その事件が花子を悲しませた。

(9a)では、花子の悲しみはその事件に向けられたものであり、(9b)では“その事件”は花子を悲しませた原因で､その悲しみが向かう先は事件そのものではなく事件に関わった人々、また事件によって急変した身の上であるかもしれない。

(10)のニ格誘因型の心理動詞は、一見すると、この一般化の例外となるようである。

(10) 花子が待ち時間にいらだった。

(10)では、待ち時間が原因で花子にいらだちという感情が生まれている。この感情の対象は、待ち時間そのものである必要はない。人気のアトラクションであるかもしれないし、ずぼらな恋人であるかもしれない。よって(10)の文に存在する意味役割は経験者と原因であり、経験者が主語位置、原因が目的語位置に生起している。よって表層語順から判断すると、日本語のニ格誘因型心理動詞については、(7)のθ役割の階層性が統語的に保持されていないように見える。

しかしながら、本論では、この事実は Pesetsky (1995)に対する反例とはならないと主張する。詳しくは 4 章で議論するが、(10)の文の派生において、Pesetsky (1995)の分析通り項構造では､経験者である花子は原因である待ち時

間より統語的に下位に生成しており、何らかの統語操作の結果(10)の表層語順が得られると考える。本論の目的である、ニ格誘因型心理動詞のみが使役化できない事実は、この統語構造をもとに説明される。

3. 提案

本論では、従来基本的に想定されてきた動詞句の構造に、追加の機能投射を想定する。この機能投射は 1 つの構文に特有のものではなく、能動文、受動文、使役文など多くの構文に共通して存在するものである。この機能投射は態の決定に大きく関与するため、VoiceP と呼ぶ。具体的な機能を(11)に示す。

(11)VoiceP

・ 被影響項が numeration に存在するとき、VoiceP が VP の上位 に投射する。

(被影響項とは Lakoff (1970)、Jackendoff (1990)らが定義するように、イベントによって状態が変化する項を指す。)

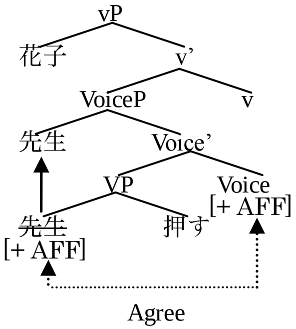
・ Voice 主要部は解釈不可能素性[u-affectedness](以降[u-AFF])をもち、[u- AFF]は被影響項が持つ[+ AFF]との Agree の結果解釈可能となる。

・ この Agree の際被影響項は VoiceP 指定部に移動する。

具体的に、他動詞の文の派生で VoiceP の機能を確認する。(12a)において、他動詞“押す”の目的語“先生”は被影響項であるため、VP の上位に VoiceP が投射する。

(12)　a. 花子が先生を押した。

b.



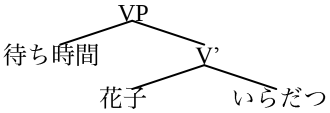
被影響項の"先生"が持つ[+ AFF]と Voice 主要部がもつ[u-AFF]が Agree し、その際に"先生"は VoiceP 指定部に移動する。Voice や v の音形化に関しては、拡散形態論を採用し、押す、Voice、v の 3 つの素性が束になり、他動詞として音形化されるとする。

4. 分析

4.1. ニ格誘因型心理動詞の項構造

Pesetsky (1995)に従うと、(8)の二格誘因型の文の項構造は(13)のようになる。

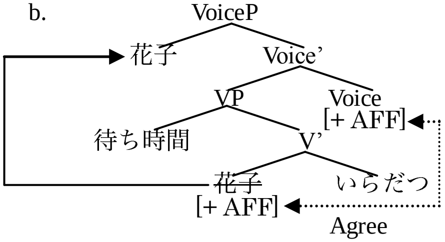
(13)



(7)の階層性に従い、原因である"待ち時間"が VP 指定部に、経験者である"花子"が動詞の補部の位置に基底生成する。2 節で指摘したように、このままでは(10)の正しい語順を保証できない。しかしながら(11)の想定によれば、"花子"は被影響項であるため、VP の上位には VoiceP が投射するはずである。従って、(13)の派生は(14)に示されるように続く。

(14) a. 花子が待ち時間にいらだった。(= (10))

b.



Voice 主要部の[+ AFF]と“花子”の[+ AFF]との Agree の結果、“花子”は VoiceP 指定部に移動する。このように(11)の想定によって、Pesetsky (1995)が主張するθ役割の階層性を統語的に保ったまま、(10)の語順を保証できた。

4.2. 使役化の条件

では、(14)のニ格誘因型心理動詞の構造が使役化できないことを説明するため、ここで日本語における使役化の条件を示す。(15)から、日本語には使役化に関して(16)のような制約が存在することがわかる。

(15) a. 先生が(花子に)押された。

b. *太郎が先生に(花子に)押されさせた。

(16) 日本語における使役化の条件

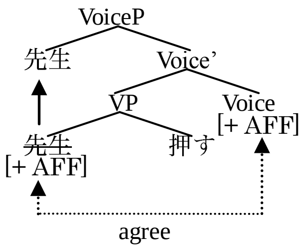
受動文は使役化できない。

(15a)は一般的な受動文であり、(15b)はそれを使役化しようとしたものであるが、非文である。(16)の条件を統語的に定義し直し、その条件にニ格誘因型心理動詞があてはまれば、本論の目的は達成される。そのためには、受動文の統語構造と、使役化という統語操作を具体的に示さなくてはならない。まず次節において、受動文の統語構造について議論する。

4.3. 受動文の統語構造

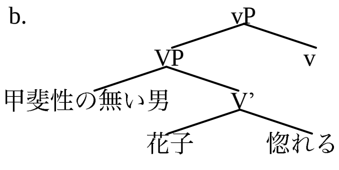
本論では、受動文とは VP の上位に VoiceP が投射したものであるとする。具体的に、(12a)の他動詞の文を受動化する。(12b)の派生を受動化すると(17b)のようになる。能動文であれば VoiceP の上位に vP が投射し、外項が導入されるが、受動文には外項が存在しないため vP が投射せず、VoiceP の上位に TP、CP が投射する。押す、Voice の 2 つの素性が束になった結果、“押される”という受動分詞として音形化する。

(17) a. 先生が(花子に)押された。

b.


興味深いことに、心理動詞の受動態に関する事実から、受動態には VoiceP が投射していることがわかる。(18a)はニ格対象型心理動詞の 1 つ“惚れる”を用いた文であり、(18b)は Pesetsky (1995)に従った項構造を用いた構造である。

(18) a. 甲斐性の無い男が花子に惚れた。

b.


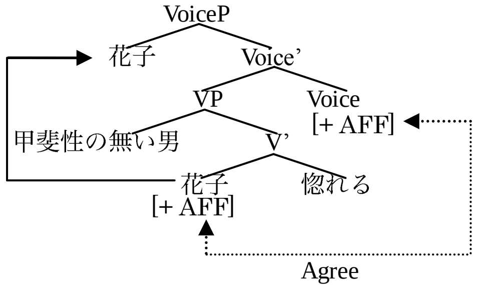
(7)の階層性に従い、経験者である“甲斐性の無い男”は VP 指定部の位置に、対象である“花子”は V の補部に生起している。花子についてこのイベントにおいてどのような状態の変化も起こらないため、花子は被影響項ではなく、

VP の上位に VoiceP が投射することはない。このことから、ニ格対象型心理動詞は受動化できないことが予測されるが、(18a)の文は(19)のように受動化することができる。ただし、(18a)と(19)の対比からわかるように、受動文からは能動文では得られなかった被害の解釈が加わる。

(19) 花子が甲斐性の無い男に惚れられた。

この被害の解釈が加わっている事実から自然に予測されることは、(11)の想定における[+ AFF]を、numeration の段階で“花子”が有しているということである。では実際に、numeration において“花子”に[+ AFF]が存在するとした上で(19)の派生を考える。すると必然的に VoiceP が VP の上位に投射することになり、派生は(20)のようになる。

(20)



被影響項である“花子”と Voice 主要部が持つ[u-AFF]の Agree の結果、“花子”が VoiceP 指定部に移動し、受動文が派生する。“花子”には対応する能動文では存在しなかった[+ AFF]が存在するため、受動文では被害の解釈が生まれる。このように、受動態にすることで初めて被害の解釈が現れる事実によって、受動文には必ず VoiceP が投射していることがわかる。

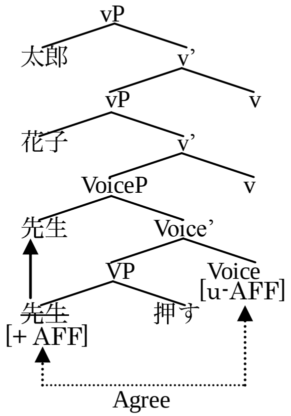
4.4. ニ格誘因型心理動詞が使役化できない事実について

受動文の統語構造が確認できたので、(16)の条件を統語的に定義し直す。統語的な使役化の方法については Hale and Keyser (1993)、Harley (2008)、Miyagawa (2010)らに従い、使役の vP によって外項を追加することで使役文

が生成されるとする。具体的に、(12)の通常の能動文を使役化し、その構造を以下に示す。

(21) a.　太郎が花子に先生を押させた。

b.

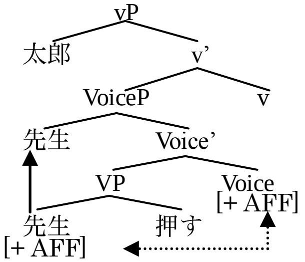


vP 指定部における名詞句は、agent の θ 役割を有する。agent とはすなわちイベントの開始者であり、(21b)の下位の vP によって表される“花子が先生を押す”というイベントを太郎が開始したことになる。これは使役の解釈である。

これに基づき、(15b)の文の構造を考えると(22)のようになる。

(22) a.　*太郎が先生に(花子に)押されさせた。(=(15b))

b.



(22a)は“先生が花子に押された”という受動文を使役化したものである。受動態の構造は既に(17b)で示しているが、その構造に vP によって使役主を加えようとしたものが(22b)の構造である。この構造が表層化したものである(22a)の文が容認不可能であることを考慮すると、(16)の条件は(23)のように言い換えられる。

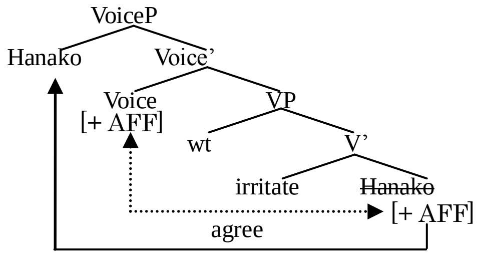
(23) 日本語における使役化の条件
VoiceP の上位に vP が投射しても使役文は生成されない。

(23)によって、ニ格誘因型心理動詞が使役化できないことが説明される。(14b)に示してあるように、ニ格誘因型心理動詞では VP の上位に VoiceP が投射している。よって(23)より、(14b)の構造を使役化することはできない。言い換えれば、ニ格誘因型の心理動詞はその項構造レベルで受動化が起きているため、使役化することができないということである。

この分析は、田桐(1965)が指摘しているような、日英語の構文的不対応の問題に対して自然な説明を与えることができる。(10)に対応する英語の文は(24a)である。日本語では能動文の形態をとるのに対し、(24a)からわかるように英語では受動文の形態をとる。この事実は、(24b)の構造と、(25)の一般的な受動文の構造を比較すれば当然のことであることがわかる。

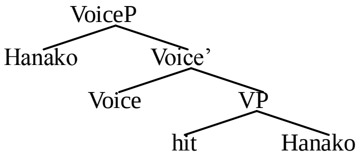
(24) a. Hanako was irritated at the waiting time.

b.



(25)　a.　Hanako was hit (by Taro).

b.



(24)と(25)からわかるように、どちらの派生においても VoiceP が VP を直接選択している。V は Voice に主要部移動し、これらの素性の束に対して過去分詞の音形が与えられる。これに対し日本語では、非心理動詞と Voice の素性の束に対して与えられる音形が"-られ"の形式であり、心理動詞と Voice の素性の束に対して与えられる音形が能動態の形式であると考えられる。

5. まとめ

本発表では、被影響項が派生に含まれる場合、VP の上位に VoiceP が投射し、被影響項は Voice との照合の結果 VoiceP 指定部に移動すると想定することで、ニ格誘因型心理動詞の項構造を正しく捉えた。また、受動態と使役態との相関関係から、日本語における使役化の条件を統語的に定義した。これにより、ニ格誘因型心理動詞が使役化できない事実を説明した。

参考文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press, Chicago and London.

Bando, Michiko (1996) "Semantic Properties of –Ni NP and –O NP of Japanese Psych-Verbs," 『大阪大学言語文化学』5, 165-177.

Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) "Psych-verbs and θ-theory," *Natural Language & Linguistic Theory,* 6, 291-352.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud,* ed. by Freidin Robert, Otero Carlos and Zubizarreta Luisa, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

Harley, Heidi (2008) "External Arguments and the Mirror Principle: On the Distinctness of Voice and v," *Lingua*, 125, 34-57.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.

Lakoff, George (1970) "Linguistics and Natural Logic," *synthese* 22, 151-271.

Miyagawa, Shigeru (2010) "Blocking and Causatives: Unexpected Competition Across Derivations," *Proceedings of the 5th Formal Approaches to Japanese Linguistics*.

Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*, MIT Press, Cambridge, MA.

清水泰行 (2007) 「心理動詞の格と意味役割の対応・ずれ –「引用構文」における名詞句と引用節の意味関係から-」, 『日本文藝研究』, 23-39.

田桐大澄 (1965) 「日英語の表現の比較」, 『現代英語教育講座』第 7 巻, 研究社.

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版.